

人類働態学会

「次世代を担う人材と学会運営に関して」

答申書

2010年1月23日

次世代検討ワーキンググループ

I. 人類働態学会の歩みとその現状

人類働態学会は、1966年の文部省科研費による「働態人類学よりみた疲労の研究」班を核として、生活人類学研究会が発足され、1970年7月に総会にて8条からなる会則の決定および会名を人類働態学研究会とし、2010年7月に学会創立40周年を迎える。また、年次大会の他に、地方会、夏季研究会、国際シンポジウム等の開催、そして、学会創設の2年目からは、他学会にあまり類を見ない英文ジャーナル誌 JHE (Journal of Human Ergology) の刊行、IEA (International Ergonomics Association) に affiliated member として加盟することになり、国内外への活発な学会活動の展開を遂行して、多大な成果を収めている。

この間、働態学の関連する科学技術分野は大きく裾野を広げ、多様化、学際領域化が進む一方、学会創設メンバーの多くが退職期を迎えつつあり、よって、次世代の学会を担う人材の育成(世代交代・継承)が急務であることが浮き彫りになっている。加えて、他学会(領域)の細分化の進展により人類働態学会の差別化が望まれる。こうした学会内外の状況の大きな変化を背景に、長期的な視野や展望に立ち、学会活動の将来に向けてどのように対処して行くべきかを具体的な形で検討し、それを学会運営に反映させ必要に迫られている。

II. 本WGの設立経緯とその趣旨

学会の次世代を担う人材と学会運営に関するワーキンググループ(以下「本WG」)は、理事会の提案に基づき、2009年度本学会総会(2009年6月14日、於日本女子体育大学)において設立が承認された。その後、本WGは、2009年10月に設置され、以後今日まで2009年10月、11月、2010年1月の計3回の会合や、電子メールによる議論などを経て、今回の答申(案)に至った。

本WGのメンバーは、若手・中堅を中心に担当理事(酒井一博理事)が人選し、下田政博氏(東京農工大学)、真家生和生氏(大妻女子大学)、水野基樹氏(順天堂大学:チーフ)、水野有希氏(東洋学園大学)、森みどり氏(神奈川大学)の5名に加え、西日本地方会からは庄司卓郎氏(産業医科大学)にお願いした。

本WG設置のバックグラウンドとして、学会執行部の世代交代(学会の2010年問題)・継承、周辺学会との差別化、働態学会のユニークな活動を会員の動向、担い手育成などが挙げられ、その影響が顕在化しつつあるようにも見受けられる。そこで、1) 働態学会の社会的貢献と活性化に向けた学会戦略、2) 学会員の世代継承とその方法、3) 学会の運営と会員の参加の3つの諮問事項に対する答申を検討した。今後、本学会が活況を呈し、一層の発展を遂げるために何をなすべきかを提案することに、本WGの趣旨があると理解している。この答申書の作成にあたって、本学会会員から諮問事項に対する意見を聞き、集積された意見を本WGのメンバーの視点から分析し、学会の活性化や展開に対する方策を提案している。本答申が、今後本学会会員全員の建設的な討議を喚起し、間もなく迎える創立40周年の節目に向けて、種々の新しい試みに着手する契機となれば幸いである。

Ⅲ. 人類働態学会の設立趣旨および研究範囲

人類働態学会の社会的役割を考察するにあたって、本学会が目指してきた学会設立の目的・趣旨を顧みると、本学会会則 第1章 総則 第3条において、「本会は、人類の働態を調査研究することを目的とし、次の事業を行う。 1. 定例の研究大会の開催（年1回以上） 2. 機関誌、会報および研究資料等の発行 3. 調査研究に関する交流の促進 4. その他本会の目的を達成するための事業」と定めている。

また、本学会の研究範囲と活動内容について、本学会公式 Web のコラム「人類働態学とは？」において、「人類は700万年の間、地球環境の中で進化し、現在も自らが築いた環境に適応し続けようとしています。人類働態学(Human Ergology)は、近年急速に変化する環境下に生活するヒトの日常の働きや生活行動と身体の性質との相互作用を探究して理解を深め、成果を応用しようとする学際的研究分野です。目的を一とする人類学、生理学、心理学、人間工学、労働科学、体育学、バイオメカニクス、生活科学、健康科学、リハビリテーション、看護学、その他関連諸分野の研究者が、人類の福祉や日常の労働生活の改善に資する知識を得るために研究をすすめています。(以下省略)」と、自ら紹介している。

Ⅳ. 本学会に関する調査と評価

1. アンケート調査の実施

本WGでは、諮問事項に対する提案の素案をWG内で集約し、それらの素案について学会員内外からの意見を調査することとした。本学会に関する調査は、より多くの意見を集積するため、地方会参加者を対象にアンケート形式で調査し、東日本地方会は11月21日（土）と22日（日）に、西日本地方会は12月10日（土）に実施した。

有効回答数は58名で、内訳は会員の有無：会員33名、非会員23名、年代：20歳代22名、30歳代12名、40歳代10名、50歳代7名、60歳代以上7名、性別：男性37名、女性19名、職業：大学生23名、大学・研究所26名、産業7名、その他1名であった。

アンケートの内容は以下の通りである。詳細は資料を参照のこと。

(1) 人類働態学会の社会的役割について

本学会を通じて得たい情報、本学会が果たすべき社会的役割

(2) 人類働態学会の活性化に向けた戦略について

産・官・民・学などとの共同研究、本学会の活性化に必要なもの、JHEの投稿を促進するための取り組み

(3) 人類働態学会の世代継承や次世代を担う人材育成について

人材育成のための講演・講座、中堅および若手研究者の定着率向上の取り組み、将来的に学会に残る要素

(4) 学会コミットメントの向上について

本学会の魅力と物足りと感じる点、取り上げてほしいテーマ、所属学会

(5) 学会の満足度

2. 調査結果の分析と評価

(1) 人類働態学会の社会的役割について

①学会活動から取得したい情報

本学会を通じて得たい情報に対して、自由記述回答であるにもかかわらず、回答者全体の65.5%(38件)、年代別では20歳代：63.6%、30-40歳代：59.1%、50歳代：78.6%と、どの年代でも6-8割近くの回答者から、多様な回答を得ることができた。

年代別の回答傾向として、20歳代では、具体的・各論的な研究テーマ・情報よりも、自分自身の研究への活用・フィードバックを念頭におき、専門・関連分野の研究動向や方法論に関する情報の取得・交換を希望する意見が多く、関連分野の研究成果や研究者の意見を積極的に求める声もあった。これに対して、30-40歳代では、むしろ多岐にわたる具体的な研究テーマ、研究情報を希望する意見が広く寄せられ、とくに、現場調査・実践事例や現状を知りたいとの現場志向のニーズが高い傾向がみられた。さらに、50歳代以上では、具体的な研究テーマ・研究成果として、いわゆる、人類働態学研究(人類の進化、生活の諸相、等)への継続的・積極的関心と、学会としての研究成果を求める意見が多く得られた。

20歳代を中心に、どの年代でも、現在の研究テーマに限定されず専門領域にこだわらない、多様な研究テーマ・方法論への関心やニーズが高いこと、関連研究分野の情報入手・研究交流への期待が多く挙げられている点など、学際的・応用的研究志向の高い本学会ならではの大きな特色といえるかもしれない。

②本学会が果たすべき社会的役割

社会的役割に対して、全体では、「学術的データの提供：55.2%」が最多で、「産官民学への研究協力：48.3%」とともに回答者のほぼ半数が選択、次いで、「産業発展への貢献（ユーザビリティ、アーゴロジードesign）：43.1%」「人材育成：41.4%」までが回答率4割を超え、続いて、「地方公共団体との連携：25.9%」「国際貢献：19.0%」の順に選択されていた。また、会員・非会員の種別で比較したところ、学会の役割に対する認識に大きな相違は見られなかった。

一方、年代別比較では、20歳代の特徴としては、「学術的データの提供」「産官民学への研究協力」よりも、「産業発展への貢献」「人材育成」の回答率の方がやや高い(45.5%)傾向がみられた。30-40歳代では、「学術的データの提供：63.6%」が最も重視され、次いで「産官民学への研究協力」「産業発展への貢献」「地方公共団体との連携」「人材育成」が同程度に重視されていた(40.0-31.6%)。これに対して、50歳以上の特徴としては、「産官民学への研究協力」「学術的データの提供」が6割を超え、「国際貢献」が「産業発展への貢献」「人材育成」と並んで回答者の半数から選択されていた。以上まとめると、本学会の社会的役割として、「学術的データの提供」「産官民学への研究協力」はどの年代でも共通して重視される一方、20歳代では「産業発展への貢献」「人材育成」が、50歳以上では「国際貢献」が、他の年代よりも重視される傾向がみられた。

(2) 本学会の活性化に向けた戦略について

①産・官・民・学などとの共同研究

自由記述による回答であるが、全体的なトーンとしては、本学会の研究成果が必ずしも効果的に社会に発信できていないという認識である。GIAP 共同研究を行うなら、明確な戦略を立てるべきであるという意見が多かった。

本学会が取り組むべき研究テーマとしては、「事故防止対策」、「高齢化対策」、「労働とストレス」、「地域活性化」に4つに集約された。第一次産業現場における作業改善から医療・介護場面まで、上記4つの視点から産官学民の連携による共同研究の発展的展開が、学会員から強く望まれているという現状である。

②本学会の活性化に必要なもの

年代別にみた本学会の活性化に必要なものは、学会の社会的役割に関する認識と類似した傾向がみられた。すなわち、20歳代では、他の年代と比べて、「産業研究者の積極的参加および発表：59.1%」「研究資金確保および公募研究：31.8%」「産業・行政との積極的な共同研究：59.1%」が積極的な支持を得ていた。30-40歳代の回答は、多様な方策に分布し、「産業研究者の積極的参加および発表」「若手研究者の積極的参加および発表」「他学会との連携・共同シンポジウム開催」が40.9%で並び、大会・シンポジウムの活性化を重視する一方、「ジャーナル誌 JHE の積極的投稿：36.4%」の支持率が多年代よりも高かった。一方、50歳以上の特徴としては、「若手研究者の積極的参加および発表：78.6%」が圧倒的に重視され、「HPの充実や広報活動の強化：35.7%」が他年代よりも重視される傾向がみられた。

③JHEの投稿を促進するための取り組み

本学会を活性化するうえで、JHEを戦略的に活用するという視点は不可欠である。全体的な結果としては、JHEに対する「広報の強化：43.1%」が最も多く、次いで、「論文英語化のサポート：37.9%」「査読日程の短縮化：27.6%」「JHEの評価（引用文献としての評価）：27.6%」「査読結果に対するサポート：25.9%」となっていた。また、近年の学界の動向と軸を一にする、「電子投稿・査読システムの導入：20.7%」という結果も見逃せない。

さらに、年代別比較による傾向では、20歳代が「広報の強化：54.5%」「査読結果に対するサポート：31.8%」が「査読結果に対するサポート：27.3%」「査読日程の短縮化：27.3%」「JHEの評価（引用文献としての評価）：27.3%」となっており、全体的結果と大きな違いは見られなかった。ただし、「論文英語化のサポート」においては、20歳代は22.7%と比較的低いものに対して、30-40歳代は50.0%、50歳代では42.9%であり、ニーズの高さが明らかとなった。また、非会員を除く会員のみ全データからも、「論文英語化のサポート：51.5%」という非常に高いニーズがあった。

(3) 本学会の世代継承や次世代を担う人材育成について

①人材育成のための講演・講座

次世代を担う人材育成のため、回答者の半数が働態研究講座を企画してほしいとの意見が挙がっており、次いで統計分析、参加型実習、科研費申請、英語論文の書き方、公募情報などの要望も高い。年代別比較による傾向では、20歳代は働態研究および統計分析が最も高く、次いで公募情報であり、30-40歳代も同様に働態研究および統計分析が最も高かったものの、英語論文の書き方、科研費申請などの要望が高かった。50歳以上は働態研究に次いで参加型実習であった。どの年代も働態研究講座の企画を要望しているが、若手・中堅はそれに加えて、統計分析・英語論文の書き方などの研究の幅を広げるための手法や科研費申請・公募情報などの研究支援に関するニーズが高い。

②中堅および若手研究者の定着率向上の取り組み

定着率向上の取り組みとして、若手シンポジウム、学会賞授与、交流会などの意見が高く、学会への定着に効果的と思われる。20歳代は学生や大学院生がほとんどであるため、若手シンポジウムや学会賞授与が6割を占め、大学院生セッションや卒論発表会などの要望も高い。30-40歳代は交流会が半数近く、次いで若手シンポジウム、工場見学実習、学会運営の参加、50歳代以上は若手シンポジウムや合宿形式の研究会などの要望が挙がった。若手が発表できる機会を増やす取り組みが必要とされており、他学会での取り組みを参考に検討すべきである。

③将来的に学会に残る要素

将来的に学会に残る要素として、学会の雰囲気、研究テーマや専門性などの意見が多く、発表のしやすさやベテラン会員からの声掛けといったサポートがあれば学会に残る要素が高い。年代別比較による傾向では、20歳代は研究テーマ(50.0%)が最も多く、次いで、学会の雰囲気やベテラン会員からの声掛けなどであり、30-40歳代は専門性や研究テーマ、学会の雰囲気(54.5%)が半数を超え、他には学会のメンバーの顔ぶれ、ベテラン会員からの声掛けなどであった。50歳代以上は、学会の雰囲気(57.1%)であり、他には専門性や研究テーマ、発表のしやすさであった。特に60歳代以上は、現在本学会に残っている方々であり、そこで意見を吸い上げると、学会の雰囲気、専門性、発表のしやすさなどの意見が多い。以上のことを踏まえると、学会の雰囲気は第一条件であると思われるが、若手・中堅が将来的に本学会に残るには、社会ニーズの合った興味・関心の高い学際的な研究テーマを学会全体で検討すべきである。

自由記述から、研究者の専門性が強く出すぎた発表を聞くと違和感を感じることもあり、会員数の維持・増加(特に若手の獲得・定着)を目指すうえで気にある。学際的かつアットホームな雰囲気を維持するためにも本学会の理念を広く共有すべきである。

(4) 学会コミットメントの向上について

①本学会の魅力と物足りないと感じる点

本学会の魅力は、学会の雰囲気をもっとも高く、次いで質疑応答のやり取りである。学会に残る要素としても、学会の雰囲気は重要視されており、学会規模がそれほど大きくないため、アットホームな印象や様々な分野の研究者とのコミュニケーションが円滑に図れるなどの意見が挙がっている。また、質疑応答のやり取りでは、並行セッションは行わず単一セッションのみ行うシステムを取っており、聴衆側の専門性の偏りがなく、様々な分野からの意見が聴けることも魅力と感じるのであろう。特に、30-40歳代は質疑応答に強く魅力を感じ、20歳代はそれに加えて懇親会にも魅力を感じていた。しかしながら、シンポジウムや一般演題への魅力は若干値が低く、学会に物足りない点として、学会のアイデンティティが不透明、働態学会がクリアすべき研究や成果の可視化など、学会が取り組むべき研究テーマおよびアウトプットに関する指摘が多くみられた。20歳代からは、発表しやすいと感じる者も多く、卒論や修論を発表する機会として、本学会に参加している学生が多い。

②取り上げてほしいテーマ

共生シンポジウムは「高齢者」「安全」「安心」のキーワードを扱い、専門断続的な取り組みをしていることに対して高く評価されており、働態学会としての統一テーマとして、社会動向に関連して今後も継続ことが望ましい。

取り上げてもらいたいテーマを具体的に挙げると、20歳代は「子どもの遊び場改善、サービスデザインやユーザビリティ」、「メンタルヘルスやコミュニケーション」、「若手研究者の育成」など、30-40歳代は、「日本の伝統技術」、「第一次産業や地域産業」、「現代の人間と環境を人類の歴史の位置づけ」など、50歳代以上は、「交通」、「高齢化社会、少子化、介護」、「労働環境」、「ロードマップ」「アジア諸国内人類働態研究交流」、「子供の発達不全の現実と有効な対策」、「医療・介護における事故原因や安全に有する技術の開発」などであった。また、過去のシンポジウムテーマをもう一度取り上げ、テーマがどのように発展しているのかを確認するとの意見もあった。

③所属学会

本学会の学際的な性質を反映して、隣接学会を中心に活動し、その一方で本学会にも所属している会員が90%以上を占める。多くは、人間工学会(51.5%)、生理人類学会(33.3%)、日本体育学会(30.3%)、日本産業衛生学会(24.2%)、産業保健人間工学会(24.3%)、産業・組織心理学会(21.2%)などである。年代別比較による傾向では、20歳代は日本体育学会(31.8%)、30、40歳代は人間工学会(59.1%)、生理人類学(31.8%)、産業衛生学会(27.3%)、50歳代以上は、人間工学会(42.9%)、生理人類学(28.6%)、日本体育学会(28.6%)であった。若手・中堅は生理人類学、人間工学、体育学などの所属が多く、これらの隣接学会との連携した企画を取り入れることは、検討の余地があると思われる。

(5) 満足度評価

人類働態学会の活動に対する満足度評価を総合分析すると、興味深い傾向が見出された。学会活動への満足度は、全体では、「4. やや満足：61.2%」「5. 大いに満足：6.1%」「3. 普通：26.5%」で、7割強が満足しているという結果であった。また、会員・非会員の種別では、会員の方がやや満足度が低い傾向はあるが、大きな相違は見られなかった。年代別比較では、20歳代では、「4. やや満足：68.4%」「5. 大いに満足：5.3%」「3. 普通：26.3%」で7割強が満足し、不満はゼロと、満足度は相対的に高かった。一方、50歳以上の特徴としては、「4. やや満足：75.0%」「5. 大いに満足：8.3%」「3. 普通：8.3%」で8割強が満足、不満はゼロで、他年代に比べて満足度が最も高い傾向がみられた。これに比して、30-40歳代は、「4. やや満足：42.1%」「5. 大いに満足：5.3%」「3. 普通：36.3%」で満足との回答は5割弱に対して、不満は「2. やや不満：10.5%」「1. 不満：5.3%」と、満足度評価が最も低かった。裏を返せば、学会の中堅世代となる30-40歳代は、本学会に対する期待・ニーズが高い層と考えられる。

20歳代中心に、産業界との連携が強く志向されていることは、今後の学会の役割・戦略を考える上で注目に値するといえよう。さらに、30-40歳代は、研究活動成果の積極的公表を活性化の重点戦略と見なし、多角的な役割・活性化方策へのニーズが高く、学会活動への満足度が低い(期待が高い)傾向と結びついているとも推測される。

V. 諮問事項に対する答申

1. 働態学会の社会的貢献と活性化に向けた学会戦略

(1) 競争的資金の獲得による研究成果の社会的発信

バス車内事故防止の研究は良い例であるが、研究テーマを学会の研究委員会などを組織して決定し、学会内で専門分野の人材を集め、競争的資金(研究費)の申請を行う。学会内で、大学や研究室の枠を超えた研究交流ができ、学会の全国大会や地方会での発表する機会が得られる。例えば、申請対象としては、文部科学省科学研究費、厚生労働省労働科学研究費、トヨタ財団、安田財団、または各種製薬会社による各種の研究助成金などが挙げられよう。

(2) 若手のみで運営する研究会

若手会員が自主企画・運営する研究会を持つ。例えば、全国大会や地方会における若手の学会賞受賞者が次の研究会企画についてメール会議等で議論する。このなかで自分たちのニーズを叶えるようにしてよい(シンポジウム、統計分析の勉強会、公募情報の共有、参加型実習など)。中堅、ベテラン会員、学会事務局はその企画を可能な限りサポートする(ゲストスピーカーとして協力、予算措置など)。この研究会運営で組織されるネットワークは、将来の学会を担う人材の確保につながる。

(3)JHE の戦略的活用

J-STAGE の参加にともない、今後、引用文献としての JHE の評価が問われる。そこで、JHE 論文の会員の相互引用を励行する。また、JHE の会員からの投稿数を増やすために、査読期間を会員（2 週間）と非会員（2 カ月）に分けるといった、会員と非会員との明確な差別化を図る。他にも、働態学分野における興味深い研究を行っている非会員に対して、積極的な学会誌への投稿を薦め、その後、学会員になることを推奨する。

2. 学会員の世代継承の必要性と方法

(1)「働態研究の方法」をテキストとした教育講演

年間のイベント（全国大会、東日本地方会、西日本地方会のほか、夏季研究会、共生シンポジウム）の中で、「働態研究の方法」を利用した教育講演・講座を開催する。本学会の特徴や現在の研究テーマ、研究手法について網羅する財産であり、本学会らしい視点の中堅、若手の会員に植え付けるのに最適だと考える。

(2)若手・中堅の学会運営の起用

世代交代・継承のため、学会を理事会や事務局だけで運営するのではなく、実働的な学会運営を行う下部組織を充実させる必要がある。この部分に若手・中堅を中心とした会員を幅広く配置し、実質的な学会事業内容の決定と実施を委ねる。組織としては、理事の各担当に幹事を複数人配置し、タテだけではなくヨコとの連携も取れるようにする。

(3)進路支援

若手研究者が今後も学会に残って活動していくために、博士後期課程への進学や学位取得のサポートをする。そのためには、中堅・ベテランの先生方の情報（専門分野、修士課程や博士課程の有無、審査可能かどうか）が必要となる。情報をデータベース化し、若手研究者が相談しやすい体制を整える。また、会員に対する公募情報の提供をする。

3. 学会の運営と会員の参加

(1)会員情報のデータベース化

学会の規模は現状を維持しつつも、むしろ会員個々のコミットメントの高さが重要と考える。自身の関心を投影させる機会を持つためにも、会員個々の興味やニーズを調査し、データベース化をする。興味のある研究テーマの他に、科研費の取得状況、自主的研究会の活動状況、論文執筆状況、講義担当など。しかし、データをどのように収集するかなど、またその後のデータベース化の技術的負担があることを検討する必要がある。

(2)修士学生・学部生の発表セッションと学会賞

若手対象の学会賞はすでにあるが、若手のみの発表セッションを設定してはどうか。若手は、自分の指導教員のほかに、自分の研究対象を他の専門家の立場や同世代から眺めて

もらい、議論することで新たな着眼点や問題意識、アイデアに到達することがある。人類働態学ならではの視点を持たせることができ、学会員としての継続性維持、学会内ネットワークの構築に寄与する。

(3) 若手・中堅研究者の研究費獲得のためのコーディネート

若手・中堅研究者は、研究したいという意欲があるものの、実際の研究費獲得については非常に難しいものがある。そのために、学会の研究会で大型プロジェクトの企画し、若手・中堅研究者をプロジェクトメンバーに募って研究費申請をし、これらのコーディネート体制を整える。

(4) 年齢制限のない学会賞

35歳以下の若手会員の学会発表に対する表彰制度はあるが、中堅以上の学会員の研究発表の活性化を図るために、年齢制限を設けない学会賞を設ける。これにより、あらゆる年齢層の学会員からの意欲的な発表エントリーが増加すると予想される。

本日ご参加された人類働態学会をより良い学会にするために、アンケートにご協力ください。

記入日 2009年 月 日

1. あなたについてお聞きします (当てはまる数値に○をつけてください。以下同様)

- 1-1 人類働態学会 1. 会員 2. 非会員
- 1-2 年代 1. 20歳代 2. 30歳代 3. 40歳代 4. 50歳代 5. 60歳代以上
- 1-3 性別 1. 男性 2. 女性
- 1-4 職業 1. 学生(学部生、大学院生、研究生など) 2. 大学・研究所(教育や研究機関、シクタクなど)
3. 産業(民間企業、コンサルタント、病院など) 4. 行政(地方自治体や行政法人など)
5. その他【具体的に: _____】

2. 本学会の社会的役割について

2-1 本学会を通じて得たい情報とは、どのような情報でしょうか。

2-2 本学会が果たすべき社会的役割とは、どのようなものでしょうか。(複数回答可。以下同様)

1. 産官民学への研究協力 2. 学術的データの提供 3. 国際貢献(海外での実地研修)
4. 地方公共団体との連携 5. 産業発展への貢献(ユーザビリティ、アーゴロジードesign)
6. 人材育成 7. その他【 _____】

3. 本学会の活性化に向けた戦略について

3-1 本学会が産・官・民・学などとの共同で研究を行った場合、より成果が上がると思われる研究とは、どのような研究テーマでしょうか? (例:国土交通省からの委託研究であったバス車内事故防止の研究)

3-2 本学会の活性化には何が必要だと思いますか。

1. 産業研究者の積極的参加および発表 2. 若手研究者の積極的参加および発表
3. ジャーナル誌 JHE の積極的投稿 4. HP の充実や広報活動の強化
5. 他学会との連携・共同シンポジウム開催 6. 研究資金確保および公募研究
7. 産業・行政との積極的な共同研究 8. 研究者データベースの公開
9. その他【具体的に: _____】

3-3 本学会のジャーナル誌 JHE の投稿について、会員からの投稿・掲載を促進するためには、学会はどのような取り組みをすべきだと思いますか?

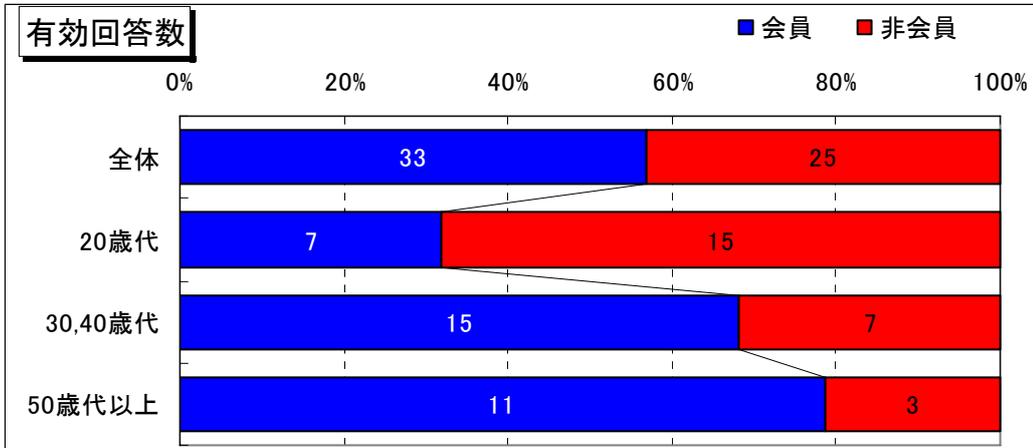
1. 広報の強化 2. 論文英語化のサポート 3. 電子投稿・査読システムの導入
4. 査読日程の短縮化 5. 査読結果に対するサポート 6. 査読状況の明確化
7. JHE の評価(引用文献としての評価) 8. 大会期間中に、口頭報告にて査読審査を行う
9. その他【 _____】

資料 2

人類働態学会に関するアンケートの集計結果

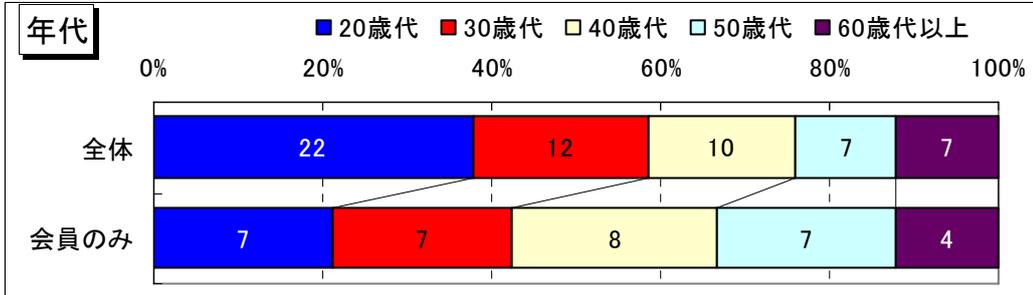
1. フェイスシート

1-1 会員の有無



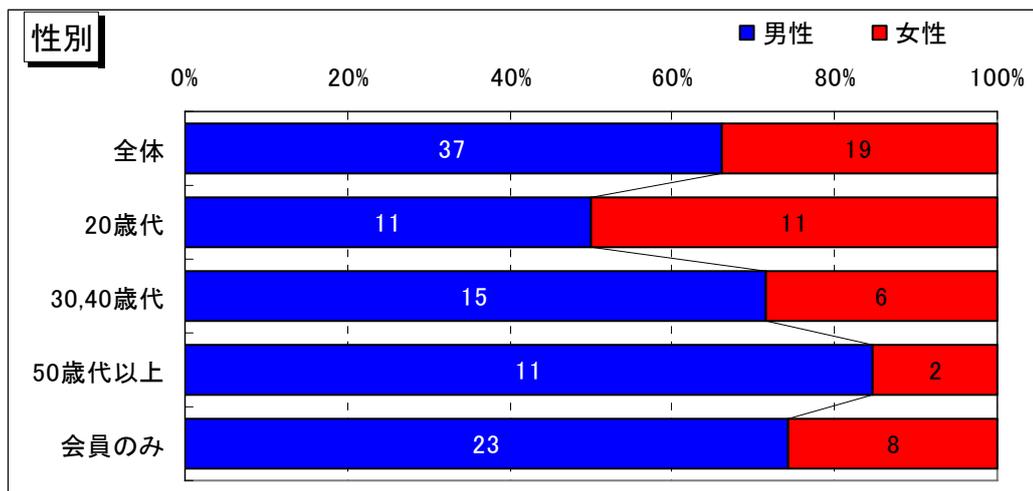
会員の有無	東日本	西日本	合計	%	20歳	30,40歳	50歳以上	会員	%
会員	25	8	33	56.9%	7	15	11	33	
非会員	14	11	25	43.1%	15	7	3		

1-2 年代



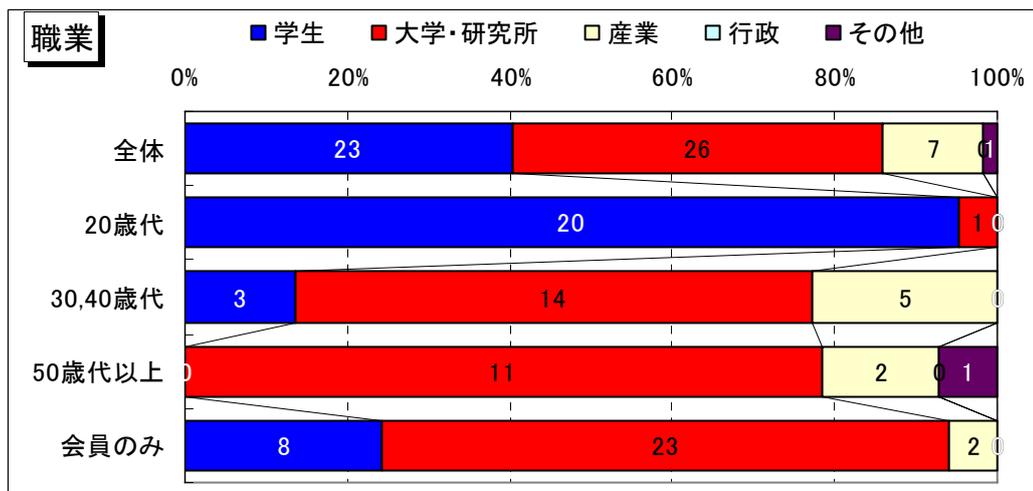
年代	東日本	西日本	合計	%	20歳	30,40歳	50歳以上	会員	%
20歳代	15	7	22	37.9%	22			7	21.2%
30歳代	8	4	12	20.7%		12		7	21.2%
40歳代	6	4	10	17.2%		10		8	24.2%
50歳代	3	4	7	12.1%			7	7	21.2%
60歳代以上	7	0	7	12.1%			7	4	12.1%

1-3 性別



性別	東日本	西日本	合計	%	20歳	30,40歳	50歳以上	会員	%
男性	23	14	37	63.8%	11	15	11	23	69.7%
女性	15	4	19	32.8%	11	6	2	8	24.2%

1-4 職業



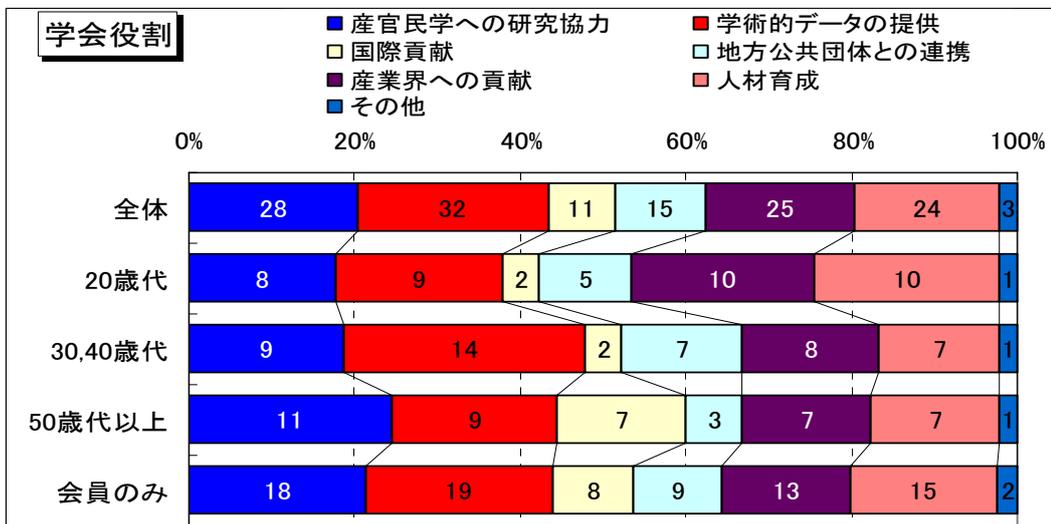
職業	東日本	西日本	合計	%	20歳	30,40歳	50歳以上	会員	%
学生	15	8	23	39.7%	20	3	0	8	24.2%
大学・研究所	17	9	26	44.8%	1	14	11	23	69.7%
産業	5	2	7	12.1%	0	5	2	2	6.1%
行政	0	0	0	0.0%	0	0	0	0	0.0%
その他	1	0	1	1.7%	0	0	1	0	0.0%

2. 本学会の社会的役割について

2-1 本学会を通じて得たい情報とは、どのような情報でしょうか。

学会として取り組んでいる内容について、その成果が不透明。活動席か(アウトカム)に関するアカウントビ
 リティーが低い。
 現場調査(フィールドワーク)
 産業界における調査研究の現状。作業・労働現場における各種問題点
 自分自身の分野にフィードバックできるように他の分野からの意見が欲しい(同じ分野同士だと視野が狭く
 障害についてのバリアフリーに関すること
 人々の日々の生活などで得られる知見。
 世界に発信できる研究手法、産業現場の介入手法・成果(他領域に応用したいと思ってさんかしている。)
 フィールドワークの事例をそれに基づいてどのような実践をしているか。
 他業種との意見交換
 現場で困っていることを提示してほしい
 様々な分野の研究に関する情報
 社会とのつながり
 日本人の暮らしと働き方に関する様々な情報と研究法
 働態学とは何か
 人類の働くさまとその諸相にあらわれる特性
 人類が今という切実な問題に直面しているのかを、学会として明らかにしてくださいと有り難く存じます
 医療界における現状を一般の方々の認知度など
 工学との接点と技術の産業化
 人類が進化していると信じがたいが、本当はそうなのか、それとも退化しているのか、学会として回答の用
 意はあるのか？あれば情報がほしい
 介護者の負担軽減と安全介護
 研究に対するご助言やコメントを頂き、さらに研究へのモチベーションを高めたい
 心身に対する様々な視点からの意見
 研究発表を通じて最新の情報と結果。研究テーマのトレンド
 作業負担の評価法、研究者の情報の場(生活)への還元の具体的方法
 研究テーマに関連する情報
 発展的な研究テーマや成果
 社会のニーズと新しい展望
 他の学会員の活動内容の把握
 自分の研究に生かせる情報
 研究の質を高めるためにどのようにしたらよいか？どのような方法があるのかなど？
 最近の研究動向
 研究発表でどのような研究を行っているか、またその手法など。懇親会で情報交換
 生理実験などの研究がどのように産業に応用されているのか
 ヒトの生活における様々な考え方
 人間の感覚について
 研究の動向
 自分の研究に関連した研究をしている人の発表内容

2-2 本学会が果たすべき役割とは、どのようなものでしょうか。



	東日本 西日本 合計 %				20歳 30.40歳 50歳以上			会員 %				
産官民学への研究協力	22	6	28	48.3%	8	36.4%	9	40.9%	11	78.6%	18	54.5%
学術的データの提供	22	10	32	55.2%	9	40.9%	14	63.6%	9	64.3%	19	57.6%
国際貢献(海外での実施研究)	10	1	11	19.0%	2	9.1%	2	9.1%	7	50.0%	8	24.2%
地方公共団体との連携	12	3	15	25.9%	5	22.7%	7	31.8%	3	21.4%	9	27.3%
産業界への貢献(ユーザビリティ、アーゴロジデザイン)	20	5	25	43.1%	10	45.5%	8	36.4%	7	50.0%	13	39.4%
人材育成	16	8	24	41.4%	10	45.5%	7	31.8%	7	50.0%	15	45.5%
その他	2	1	3	5.2%	1	4.5%	1	4.5%	1	7.1%	2	6.1%

3. 本学会の活性化に向けた戦略について

3-1 本学会が産・官・民・学などとの共同で研究を行った場合、より成果が上がると思われる研究とは、どのような研究テーマでしょうか？

本学会(に限らずですが)は、成果を社会発信することが必ずしも成功していないように思います。良い取り組みをしても、効果的に発信できていなければ、本学会の活性化に繋がらないと思います。現状のままでは、疲弊するだけなので、GIAP共同研究を行うなら、きちんと戦略をたてるべきだと思います。

メーカー、建築、官などとの共同アゴロジデザイン開発

事故防止、リスク評価、高齢・障害者の公共物(手すり、トイレ)の評価、第一産業の作業改善

社会全体から見れば局所的な問題に対して、規模な組織で比較的少ないコストで解決できる研究など。

建物に関するユニバーサル

本シンポジウムでもあったが、「高齢者の生活と安全対策」という研究が現代社会において意義があり成果もあがるのではないだろうか。しかし、高齢者の安全対策といっても広いので「一人暮らし高齢者の孤独死防止」を研究テーマにとり個人経営ベースの農作業改善

複数の学会員が手掛けている関連のテーマをつなげ、それを学会として発展させればよい(例えば、自転車の安全事故)

厚労省と労働とストレス、職場定着率の研究(なぜ看護師はやめるのか)

治験の推進

人間観察およびそのような着眼点からデータ解析が必要とされるテーマ。(例、災害発生時の働態研究から公共施設、交通の安全を提案する。)

組織や交通に関するテーマ

高速道路などの速度規制の適正化をはかる研究(東名高速の規制80キロでは運転していて眠くなりませんか)

ツール多角的なもの。生活に根差したもの

事故防止と健康リスク低減、産業・生活の改善

人類の未来のために、今何が最も必要なことなのかを、産・官・民・学挙げて明らかにする段階かと存じます

医療・介護における事故原因の追及。医療・介護の安全に有する技術の開発

安全・安心・リスク・研究

介護施設従事者の夜間における負担軽減策

医療に対する具体的な研究

高齢者・障害者の動作

地域活性化につながる内容(例えば、ランドスケープデザインを想定したセラピーやメンタル・フィジカルケア、加えてインフラ整備やプロジェクトマネジメントに関わるもの)→できれば専門の異なる研究者同士で成果を持ち寄れるものがよいと思って上記のような提案をしてみました

高齢者のくらしに関する課題、在宅

あったほうがよい具体的なテーマは安全をキーワードに何か考えられないか？

作業改善、サービスデザイン

事故防止、作業改善などのテーマ、働きやすい職場の提案などの複数の領域からのアプローチをする必要があるテーマ

ユーザビリティ、アーゴロジデザイン

文部科学省から委託のあった、公共施設(老人ホーム、学校、障害者学校など)の施設設計案

製品開発時に有効な簡易的で低コストに実施できる仕組みの検討

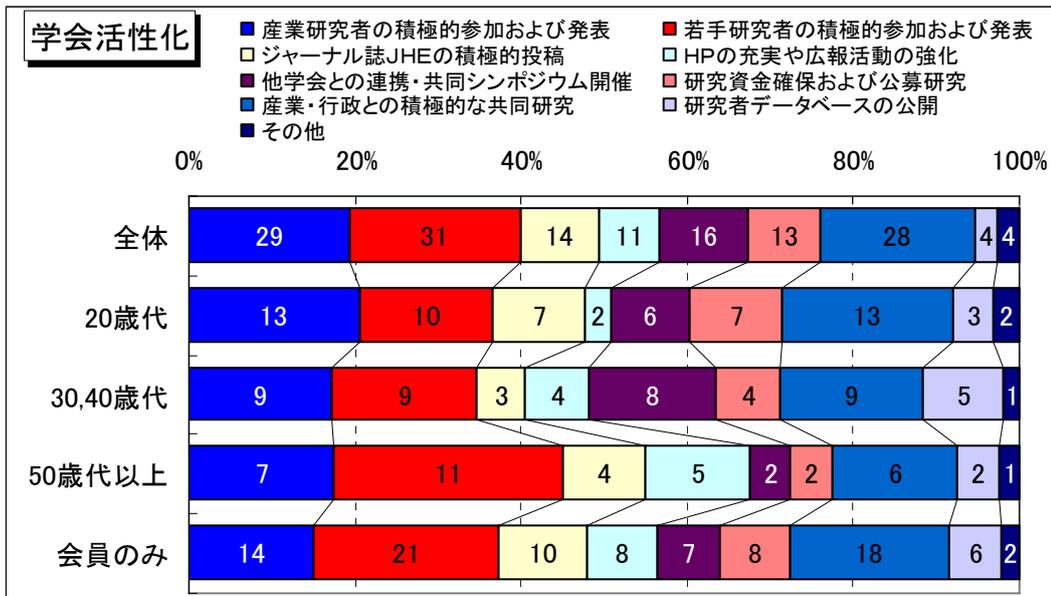
暮らしの中でのエラーの調査、及びそのエラー対策の提案

地域の高齢化対策、交通の問題など

生活の見直し

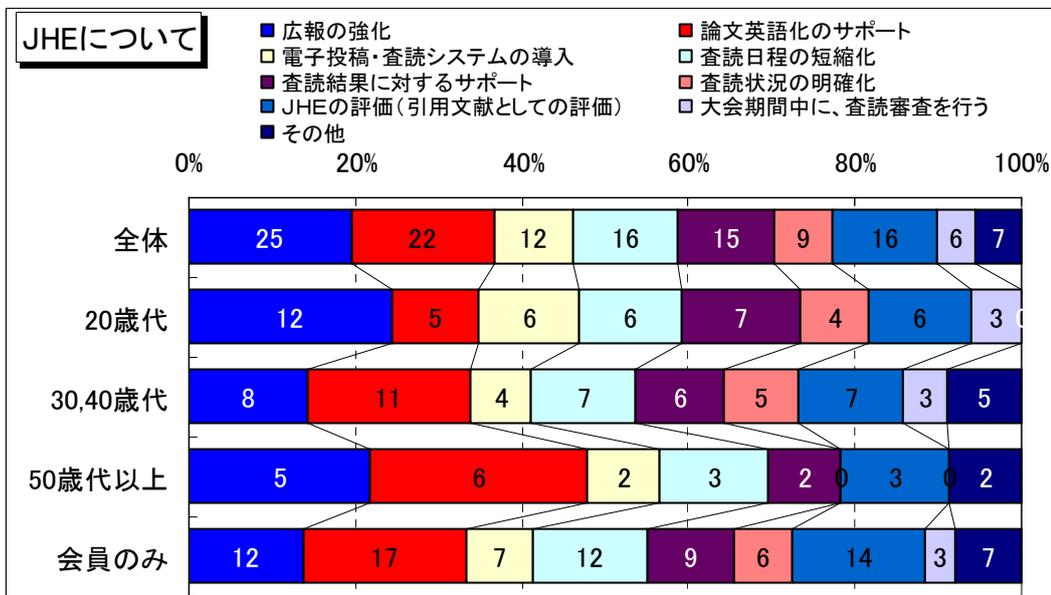
政策とも関連したこと等

3-2 本学会の活性化には何が必要だと思いますか。



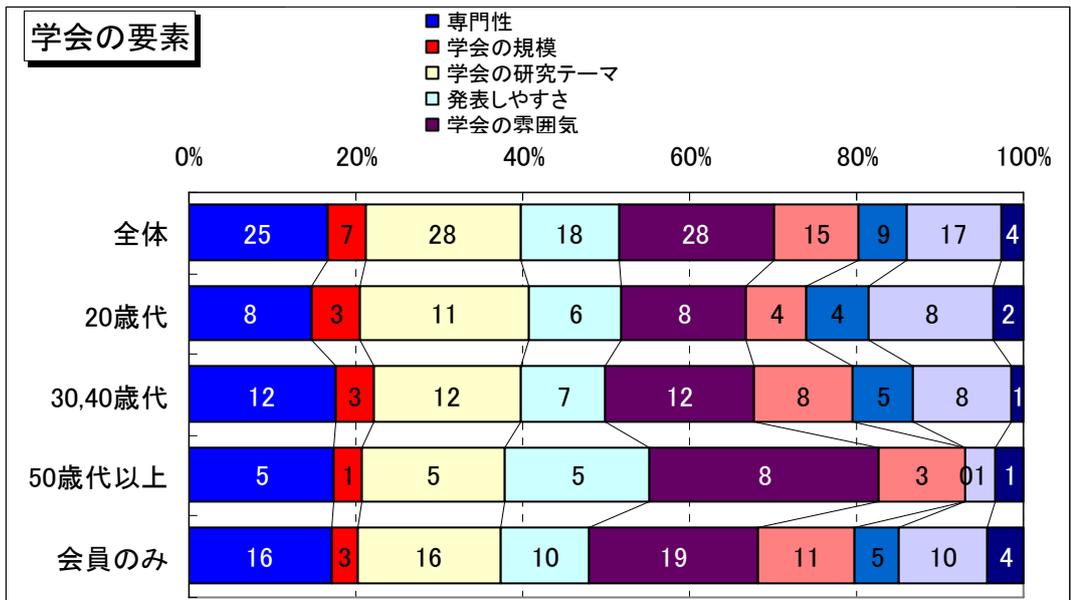
	東日本	西日本	合計	20歳	30,40歳	50歳以上	会員 %
産業研究者の積極的参加および発表	21	8	29	13	9	7	42.4%
若手研究者の積極的参加および発表	26	5	31	10	9	11	63.6%
ジャーナル誌JHEの積極的投稿	11	3	14	7	3	4	30.3%
HPの充実や広報活動の強化	5	6	11	2	4	5	24.2%
他学会との連携・共同シンポジウム開催	11	5	16	6	8	2	21.2%
研究資金確保および公募研究	11	2	13	7	4	2	24.2%
産業・行政との積極的な共同研究	21	7	28	13	9	6	54.5%
研究者データベースの公開	1	3	4	3	5	2	18.2%
その他	2	2	4	2	1	1	6.1%

3-3 本学会のジャーナル誌JHEの投稿について、会員からの投稿・掲載を促進するためには、学会はどのような取組をすべきだと思いますか？



	東日本	西日本	合計	20歳	30,40歳	50歳以上	会員 %
広報の強化	14	11	25	12	8	5	36.4%
論文英語化のサポート	17	5	22	5	11	6	51.5%
電子投稿・査読システムの導入	9	3	12	6	4	2	21.2%
査読日程の短縮化	13	3	16	6	7	3	36.4%
査読結果に対するサポート	10	5	15	7	6	2	27.3%
査読状況の明確化	8	1	9	4	5	0	18.2%
JHEの評価(引用文献としての評価)	13	3	16	6	7	3	42.4%
大会期間中に、口頭報告にて査読審査を行う	4	2	6	3	3	0	9.1%
その他	6	1	7	0	5	2	21.2%

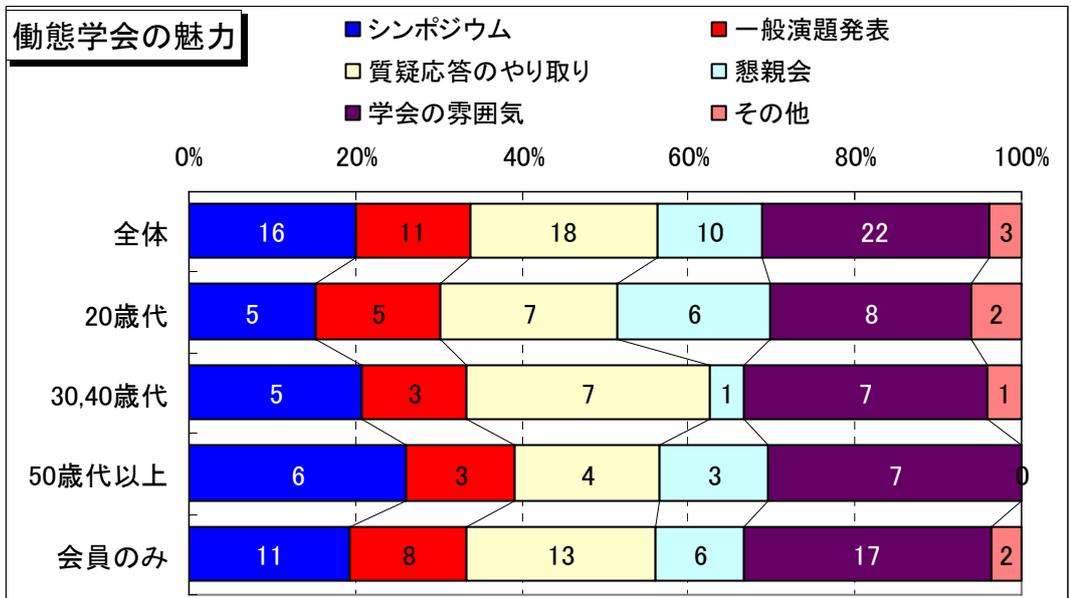
4-3 あなたが将来的に学会に残る要素は何だと思いますか。



	東日本	西日本	合計	20歳	30,40歳	50歳以上	会員 %
専門性	17	8	25	8	12	5	16
学会の規模	5	2	7	3	3	1	3
学会の研究テーマ	20	8	28	11	12	5	16
発表しやすさ	13	5	18	6	7	5	10
学会の雰囲気	19	9	28	8	12	8	19
学会メンバーの顔ぶれ	11	4	15	4	8	3	11
交流会の多さ	5	4	9	4	5	0	5
大御所会員からの声かけ、話題提供、はげまし	12	5	17	8	8	1	10
その他	4	0	4	2	1	1	4

5. 学会コミットメントの向上について

5-1 本学会に参加して、どのようなことに魅力を感じましたか。



	東日本	西日本	合計	20歳	30,40歳	50歳以上	会員 %
シンポジウム	16	16	41.0%	5	5	6	11
一般演題発表	11	11	28.2%	5	3	3	8
質疑応答のやり取り	18	18	46.2%	7	7	4	13
懇親会	10	10	25.6%	6	1	3	6
学会の雰囲気	22	22	56.4%	8	7	7	17
その他	3	3	7.7%	2	1	0	2

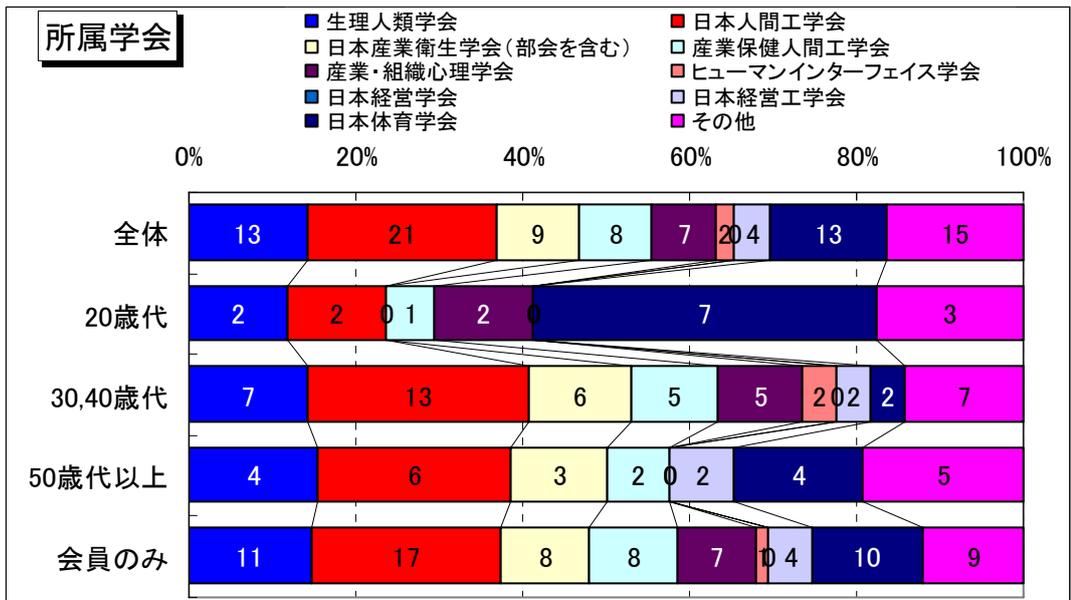
5-1 本学会に参加して、物足りないと感じる点。

働態学会のアイデンティがどうも見えない。働態学会でなければ解決できない課題とその成果を可視化してほしい。
企業研究者や行政の方からコメントが欲しい。
学会規模に適した運営。(例えば、会場の広さなど、小さい部屋でマイクを使わずに討論するなどアットホームな雰囲気がいいのではないか。)
学会にとって興味深いテーマとそうでないテーマがはっきりしており発表者に伝わりやすい風土がある気がする。今後の若手会員増加を目指す上で少し気になる。
中堅から大御所の会員が減っている。
研究内容
成果の論文化(JHE、それ以外とも)、成果の広報の進め方
さまざまな専門家が集まってワイワイと討論できる雰囲気がとてもよいと思います
参加者の方々の専門性を強く感じています。もっと広く理念を共有できればと思います。
国際的なシンポジウム、アジア地域内の研究交流
学会の活動にあまり参加しない会員もいるので何か活動的になれるきっかけがないかと思う
参加人数が少ないと寂しい
卒論生、修論生等への発表の機会を多くする、教員が指導する
各自、バリエーションに富む研究テーマで大変勉強になりますが、学会単位でクリアすべき問題・テーマというものがより強くお出せれば統一感が出てくるのではないかと思います
シンポジウムの参加者が少ない

5-2 本学会に取り上げてほしいテーマにどんなものがありますか。

「共生シンポ」はとても良いと思います。「高齢者」「安全」「安心」のキーワードを扱い、専門断続的な取り組みを高く評価していますが、共生シンポに参加した人は翌日の大会にはあまり出席されないのが残念
社会動向に関連したテーマ「共生」のような
第一次産業の改善活動、伝統工芸や技能が高い職種の工場見学
日本の伝統技術・生活(労働含む)様式に関するテーマ(温故知新的なテーマ)
例えば「子どもの遊び場改善のように、安全な公園づくりに貢献できる研究を展開することにより、より社会のニーズの高い学会になれると思う。
フィールドワークに基づいた現代の人間と環境を人類の歴史のにどう位置づけて理解するか。
身体拘束とは？
メンタルヘルスに関するテーマ
10年以上前横浜で行われたシンポジウムで取り上げたテーマWorldSystemはとても興味深い問題でした。10年経った今、それがどうなったかももう一度取り上げてはどうでしょうか
学際的テーマ
(人の特性に見合った)働く場所生活の場の良好実践
子供の発達不全の現実と有効な対策について
3-1の通り
ロードマップ、アジア諸国内人類働態研究交流
様々な年代のコミュニケーションについて
上記の回答の続きにもなってくると思いますが、多様な研究テーマに統一感をもたせるために身体/環境/メンタルケア/労働といったセクションに分けて、それらをまとめあげるテーマがあるといいと思います。
エネルギー利用、交通システム、バスの規格、車、道路、信号、高齢化社会、少子化、介護、労働環境、
ケイタイ、住宅、農業、人口等々
サービス工学、サービスデザイン、ユーザビリティ
若手研究者の育成確保
地域産業の活性化

5-3 他学会で所属している学会



所属学会	東日本			西日本			合計			20歳		30,40歳		50歳以上		会員%	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数
生理人類学会	6	22.4%	7	22.4%	13	22.4%	2	9.1%	7	31.8%	4	28.6%	11	33.3%			
日本人間工学会	13	36.2%	8	25.0%	21	36.2%	2	9.1%	13	59.1%	6	42.9%	17	51.5%			
日本産業衛生学会(部会を含む)	5	15.5%	4	12.5%	9	15.5%	0	0.0%	6	27.3%	3	21.4%	8	24.2%			
産業保健人間工学会	6	17.6%	2	6.3%	8	13.8%	1	4.5%	5	22.7%	2	14.3%	8	24.2%			
産業・組織心理学会	6	17.6%	1	3.2%	7	12.1%	2	9.1%	5	22.7%	0	0.0%	7	21.2%			
ヒューマンインターフェイス学会	1	3.0%	1	3.2%	2	3.4%	0	0.0%	2	9.1%	0	0.0%	1	3.0%			
日本経営学会	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%			
日本経営工学会	3	8.7%	1	3.2%	4	6.9%	0	0.0%	2	9.1%	2	14.3%	4	12.1%			
日本体育学会	12	33.3%	1	3.2%	13	22.4%	7	31.8%	2	9.1%	4	28.6%	10	30.3%			
その他	12	33.3%	3	9.4%	15	25.9%	3	13.6%	7	31.8%	5	35.7%	9	27.3%			

6. その他

6-1 本学会に対してお気づきの点をご記入ください

GIAP各セクタの連携も重要ですが、地域格差(特に西日本)対策も考える必要があると思います。地方での活性化活動策も検討いただけたいと思います。

JESニーズ対応委員会の方向性と似ていますね。多くの学会で、このような取り組みが展開されることを期待しています。

大会参加者がかなり偏っている。アクティブメンバーのすそ野を広げる工夫を。

東日本地方会の鍋を復活してほしい。

学会員による研究論文がJHEに載っていない。研究発表が成果につながっていない(学術成果という意)

家庭的な雰囲気や馴染みやすい学会ではないかを感じる。

優秀な先生方多く会員であられるので、若手もプライドを持って所属したいと思える学会ができあがっている規模が小さい分、会員の先生とコミュニケーションがよいと思う。

皆疲れているのでは。

良くも悪くも、時間はルーズ(いつも議論が熱心で時間通りに終わらないが参加者は時間が延びても楽しんでるようだ)

先生方があたたかく受け入れてくださるので雰囲気が非常に良い学会だと思います。

この学会の良さを話し合うこと、研究方法のよさの一層の交流・PR

共生をテーマとしたシンポジウムシリーズの成果をぜひまとめましょう

規模は小さいがその分先生方との関わりやつながりなどのコミュニケーションが円滑に行える

さらに参加人数が増えるとよい

学際的な学会であること。30・40代の研究者が少ないこと

発表者は発表したら論文にして欲しいし、その意識をもって研究計画を立ててほしい

若手の研究者が定着していない。ミドル層40~50代の研究者が少ない

発展的解消も視野にいれる

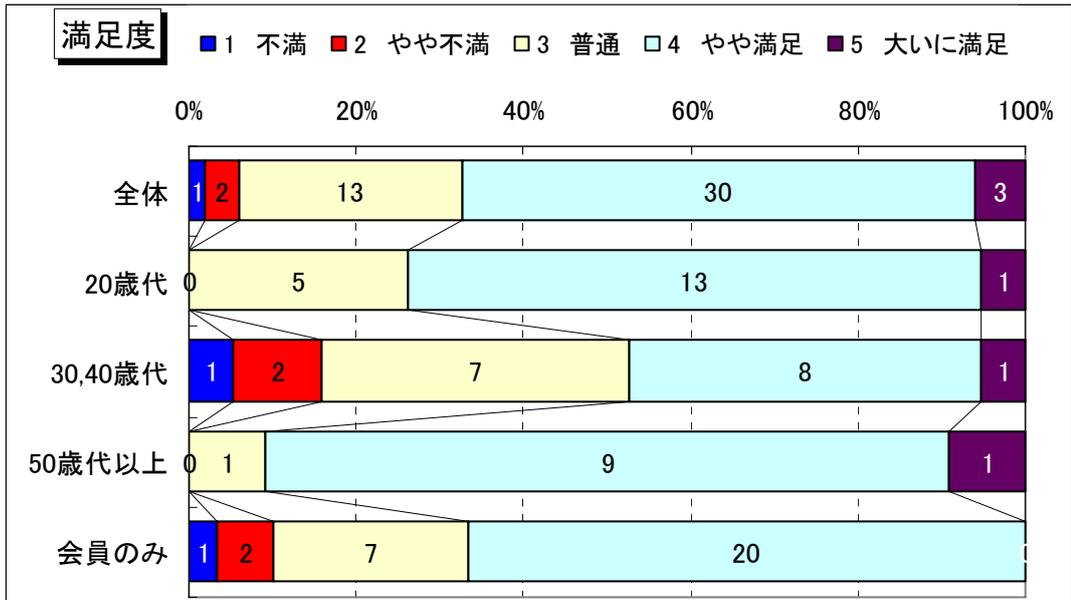
参加者が少ないのが残念です

発表しやすい学会なのでたいへんいいと思います。

雑誌の発行数が年3~4回(冊)であれば投稿したいが、年1冊では少なく魅力に欠ける。

和文誌があると良い

6-2 学会の満足度



	東日本 西日本 合計				20歳 30,40歳 50歳以上				会員 %			
1 不満	0	1	1	2.6%	0	0.0%	1	4.5%	0	0.0%	1	3.0%
2 やや不満	2	0	2	5.1%	0	0.0%	2	9.1%	0	0.0%	2	6.1%
3 普通	7	6	13	33.3%	5	22.7%	7	31.8%	1	7.1%	7	21.2%
4 やや満足	23	7	30	76.9%	13	59.1%	8	36.4%	9	64.3%	20	60.6%
5 大いに満足	3	0	3	7.7%	1	4.5%	1	4.5%	1	7.1%	0	0.0%